

表 7.4-1 ライフサイクルコスト D T C の原則の例
(D T C ; どちらが得かコストで考える)

- (1) 対象製品の生涯運転時間の基準を決める (例えば 7,500 時間)
- (2) ライフサイクルコストの計算は、上記運転終了までに、設計案の違いにより生ずる「差のコストのみ」に着眼し判断する。
- (3) 製品の製造に少し余分にかかる費用と生涯運転中に発生するオペレーティングコスト (物価、人権費、燃料代、補用品、修理代等により構成される) の比較による有利不利の判断は、いずれも同じ年度価格で比較判断する。

理由と条件

投資金額に対する金利とオペレーティングコスト (物価、人件費等) の上昇率はほぼ同じ (5 ~ 10%) と見て、概略打ち消しあうものとする。

比較・判断をする対象の範囲は、次項に示す例の程度までとし、ここに示した概略の比較計算方式で充分とする。

- (4) ライフサイクルコスト設計を適用する設計テーマの基準 (例) は、対象製品の性質により異なるが、例えば次のような設計テーマを基準とする。

ライフサイクルコストの差が、製品単価の 1/100 以上の差となる可能性のある設計テーマを検討するとき。

比較設計案につき、信頼性、整備性の差が大きいため、設計案の選択にライフサイクルコストの差も一要素として判断をしたいと考える設計テーマがあるとき。

ユーザーがライフサイクルコスト上の比較を希望するテーマがあるとき (一般に、ユーザーは設計や製造側と異なった観点を持っているのでその希望が出されることがある)

(注) この表の考え方は防衛庁が審査の上、中等練習機 X T - 4 の開発基準に正式に取り入れた。